

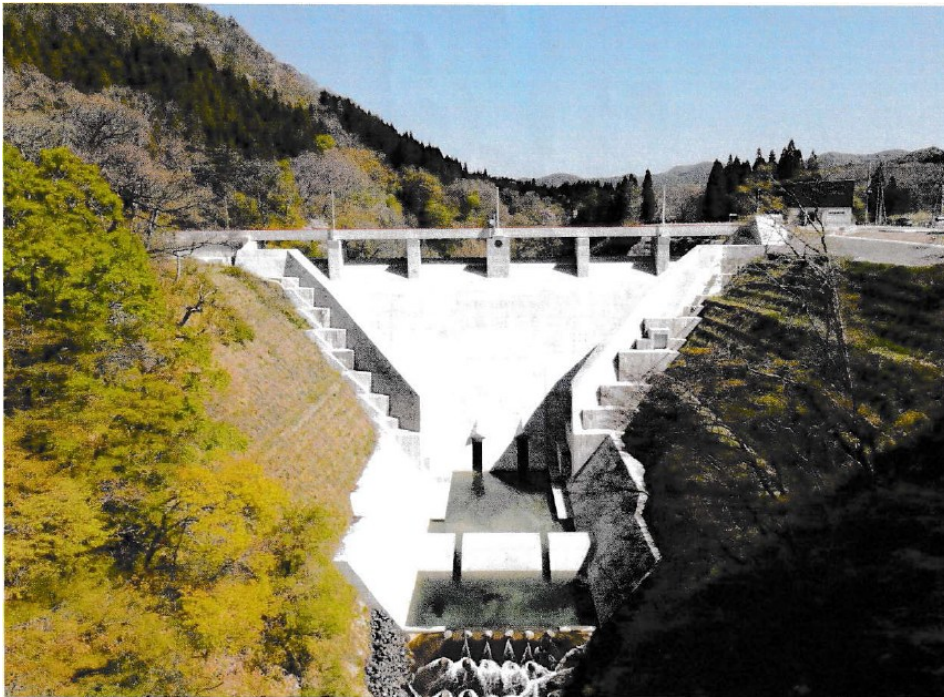
山形県作成「最上小国川流水型ダム～運用開始から5年～」への反論

最上小国川の清流を守る会

はじめに

川辺川ダムの建設が検討されているとき、球磨川漁協の組合員に配布された山形県作成の表記資料には都合のいいことしか書かれていません。

これまで地域住民と協力して最上小国川的环境調査を実施してきた当会として、これに憤慨し、以下に反論します。



←資料の表紙
(山形県作成)



←砂泥で満杯
になったダム
減勢工
(当会撮影)

注) これ以降、□枠内は資料の内容、◎はこれに対する反論。

❖ ダムの目的 ～赤倉地区を水害から守る～

最上小国川の沿川は、昭和 30～ 40 年代にかけて甚大な洪水被害が発生しており、これらの災害を契機に、多くの箇所では河道改修が行われていました。

しかし、最上町赤倉地区(ダムの下流約 2 km 地点)では、温泉旅館が川沿いに立ち並び、温泉への影響等が懸念されることから、河道の拡幅や掘削が制限され、抜本的な改修に至らず、度々洪水被害が発生していました。

◎当会ではダムに頼るのではなく、温泉街の再開発を含めた治水対策を提案しました。しかし県は穴あき(流水型)ダムを建設しました。その結果、確かに洪水の一部を防ぐことはできましたが、苔の薫りのするアユではなくなったことで釣り客は減少し、守るべき対象とした温泉街の客足は遠のきました(後述)。

❖ ダムの効果(洪水調節の実績)

最上小国川流水型ダムでは、運用開始からこれまでに 2 回洪水調節が行われ、下流の河川水位の低下が図られました。

◎ダムが洪水調節するのは当たり前です。しかし、同時に、**ダムでは防げないことやダムの副作用もあるのです。**

ダムでは防げないこと:2024 年7月の豪雨では、地元消防団は温泉街を内水被害*から守ろうと臨時のポンプ車を出動させて一晩中対応に迫られました。

ダムを造っても内水被害の不安は解消できなかったことになります。

*:川の外側に降った雨が温泉街に溜まって、水位が高くなった川に排水されずに起こる洪水被害。



2024年7月26日02:09



同04:19



同08:19

一晩中対応に迫られた地元消防団

ダムの副作用:洪水時にダム上流側に出来るダム湖の底には大量の泥が沈殿します。そして、それがその後の何でもない雨で洗い流されて川が濁るようになりました。ダムが出来る前は、雨が降っても翌日には川の水が澄んで釣りができると評判の川でした。



ダムの管理道路に溜まった泥

高橋重美最上町長の話

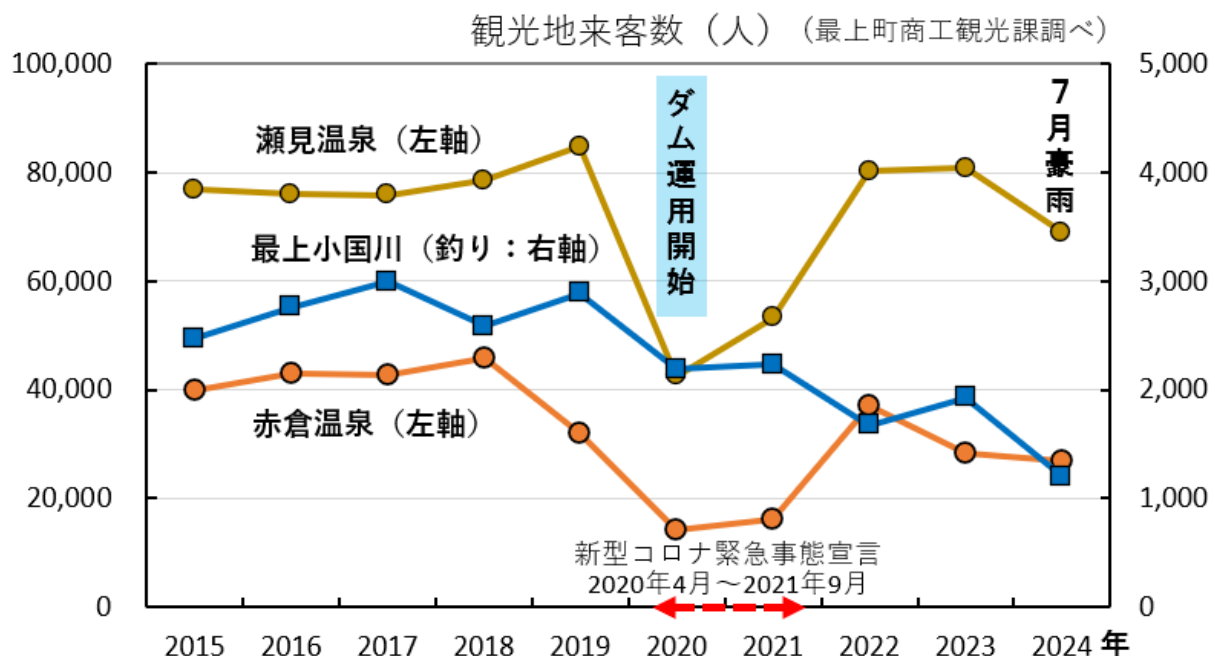
ダムの効果は抜群。令和 6 年 7 月豪雨の際も、赤倉地区を守ってくれた。赤倉地区をはじめ、町民の皆さんから『町長さん、ダムがあって良かったね』と言ってもらえた。ダムは地域の安全・安心を守る最初の砦。日本全体で水害がおきているなか、やはりダムは大事だ。」

◎ダムの効果があったのは事実です。しかし、内水被害の不安が払拭できないなど、手放して喜べる状態ではないのも事実です。
そればかりか当初期待したほどのダムの地域振興の効果はなく、釣り人も温泉客も減少しています。

同上

「ダムツーリズムを進めたい。最上町を通る国道 47 号沿いの宮城県大崎市や加美町にもダムがある。これらの自治体と連携した観光振興ができたらと考えている。また、太陽光などクリーンエネルギーを使ったダムのライトアップなども出来たらいい。政府では地方創生の第 2 期として、『都市と地方の共生社会』と言っている。都会にない地方の魅力をいかに発信するか。ダムを町の観光資源の一つとしたい。」

◎ダム建設後5年が経つのに、実質的な成果を語らず、希望的意見を述べているだけです。最上町観光課の調べでは温泉街の来客数や最上小国川の釣り客は、ダム建設後減少し、コロナ禍が収まって回復しないまま、温泉街は疲弊しています。足元を見て対応策を検討してほしいところです。



❖ 環境保全の取組み

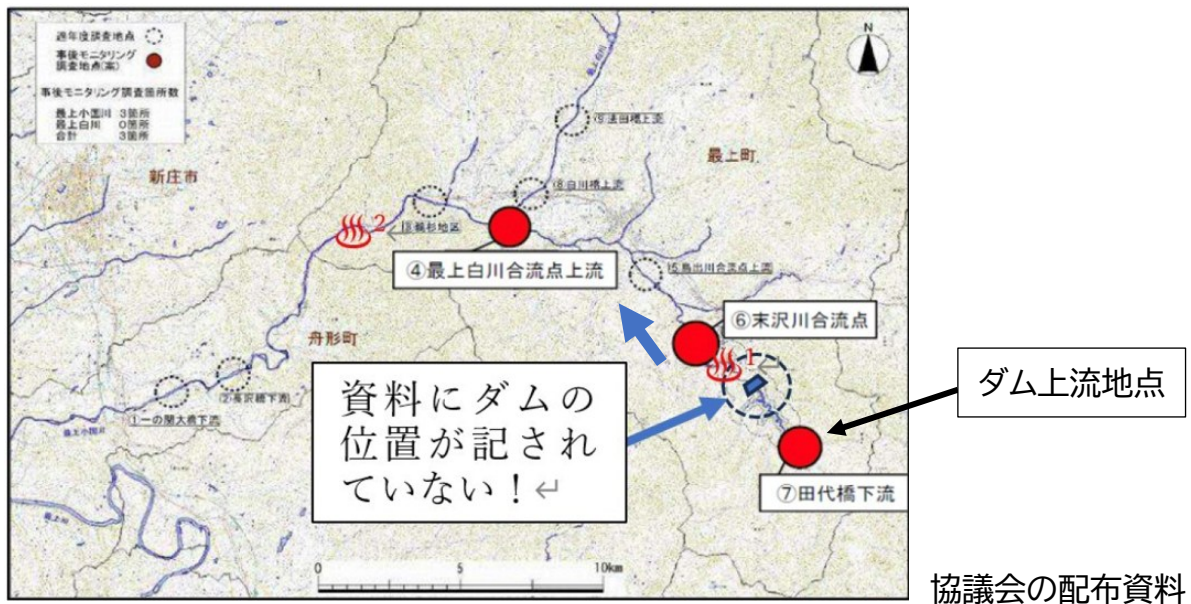
ダムの建設に伴い、ダム建設予定地周辺及び最上小国川の環境保全を図るため、学識経験者や地元関係者を構成員とする「最上小国川流域環境保全協議会」を平成 21 年 1 月に設置しました。

ダム建設前から建設中、そして完成後の現在も、県が継続して行っている環境調査の結果に基づき、協議を行っています。(令和 6 年度までに 23 回開催)

これまでの協議会においては、ダム建設後の環境に大きな変化は無いとの見解を頂いています。

◎協議会の資料を検討したところ、魚介類調査にはダム上流の地点が入っており、このダムの影響を受けない地点のデータに引きずられて、きれいな水に住む魚類が多いことから、ダム建設後の大きな影響は見られないとしていました。

しかも協議会で配布される資料にはダムの位置が示されていませんでした。協議会に出席した委員はこれを知らされないまま審議したことになります。



原慶明山形大学名誉教授(最上小国川流域環境保全協議会委員長)の話

ー現時点でダムによる環境への影響やダムの効果についてはどうお考えですか。

「今のところ赤倉地区などダム下流域の洪水被害は抑えられているので、流水型ダムの機能は円滑に働いていると思います。また、ダム周辺の自然環境、河川の水質や河床構造に大きな変化はなく、ダム建設の影響は最小限に抑えられたのではないかと考えています。」

◎ダム建設後ご自身が足を運ばれて現地を見てコメントされているとは思えません。

伊藤欣一小国川漁業協同組合長の話

ー運用開始して5年、最上小国川流水型ダムの影響をどのように感じていますか。

「ダムができたからアユが釣れなくなったという話や、アユ釣りができなくなったなどの話は聞いていません。また、組合員から直接の苦情も届いていません。昨年7月25日の豪雨で、赤倉温泉などが洪水の被害から守られたことから、ダムが出来て良かったという声が多く聞かれます。」

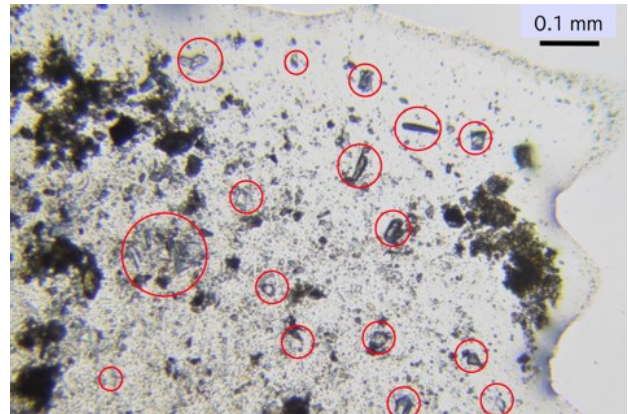
◎ベテランの組合員や県外から訪れている釣り人からは、最上小国川のアユはダメになったと言う話を聞いています。これには県と漁協に最上小国川の河川環境を守るという姿勢が見られないからではないでしょうか。昨年の豪雨災害の復旧工事を含めたこれまでの河川工事はアユの生態環境を考慮したものとはなっておらず、釣り場の8割が失われたという声も聞かれます。

同上

ー最上小国川のアユの評価はいかがですか。

「最上小国川のアユの評価は高い。姿がきれい。色目もいい。味も自慢できる。『松原アユ』として明治天皇に献上したアユ。昨年(令和 6 年)は特に美味しいとの評価をいただいています。天然アユの遡上も多く、自然産卵するアユもあります。放流も約 55 万尾しており、さらに小国川を PR していきたいと考えています。」

◎『松原アユ』はダムが出来る前の遠い昔の話です。現在はとても献上できるようなアユではありません。ある川漁師は、泥のついた苔を食べたアユはそのままでは商品にならず、“いけす”に放して糞を出させてからでないとは出荷できないそうです。



アユの糞から多数検出された泥粒子(赤丸印、当会撮影)

同上

ー小国川漁協も含め、県内のアユ漁獲量が長期的に減少してきている原因はどのようなものと考えていますか。

「昨年、最上小国川では天然アユの遡上も多く確認されました。放流も多くしているので絶対数はいるが、洪水などでアユが流されたり、高齢化が進みアユ止めを設置しての漁や刺し網、投網を使って捕獲する人数が少なくなり、漁獲量が減少してきている。また、カワウによる被害も大きく、編隊を組み群れで来襲しアユを餌食にしていることも要因になっています。加えて、昨年は 10 月末での漁期終了後にもアユの姿が見かけられた。温暖化などで自然の変化も少なからず影響しているのではないかと感じています。」

◎アユの漁獲量が減少していることは認識されているようです。この要因として組合員の高齢化などをあげていますが、ダムによる環境変化の影響が無いとは言い切れないのではないのでしょうか。

❖ ダムの維持管理

令和 2 年の運用開始以来、最上総合支庁では、各設備の点検やダム周辺の環境保全、濁度計測及び出水後の流木除去などの維持管理を行っています。

今後も、ダムの機能がしっかりと発揮できるよう点検保守や環境の保全に努めてまいります。

◎県は令和3(2021)年3月に最上小国川流水型ダム長寿命化計画を策定しています。これによれば、令和3～令和42年(40 年間)に 18.6 億円程度(内訳:土木構造物 5.2 億円程度、電気通信設備 13.4 億円程度となり、今後40年間にわたり毎年約5千万円出費することになります。ダムを維持するにもお金(税金)がかかるのです。

❖ ダム見学、出前講座、広報

最上小国川流水型ダムの役割についてご理解いただくため、ダム見学や出前講座を行っています。これまでに地元小学校や赤倉温泉振興対策協議会など、延べ 24 団体、延べ約 320 人が参加されています。

◎県はダムの下流側に展望台を作りましたが、ここから見える景色からは何の感慨も湧いてきません。これではもう一度来たいと思う人はいないのではないのでしょうか？



ダム展望台から見える景色

おわりに

ダムの影響は今後じわじわと現れてきます。当会はこれからも見守っていく予定です。川の管理は行政に任せておけば良いというものではなく、地域住民の意見を取り入れて進めて行くという本来の姿に戻るべきではないのでしょうか。